

## 言葉がけの回数によるいじめ認知の違い

滝沢麗命 厚木看護専門学校 富田 新 明星大学心理学研究科

キーワード：いじめの判断基準、同じ言葉がけの繰り返し頻度、  
いじめを認知するための言葉がけの分類

### 要約

本研究の目的は、言語的表現とその表現に遭遇する回数に着目して、いじめの判断基準に違いがあるかどうかを明らかにすることであった。まず、熊谷ら（2016）によって抽出された言語的表現のカテゴリー『非難』『激励』の項目を利用して、明星大学心理学部の学生 124 名を対象に、文部科学省が提示した架空事例において、その言語表現に遭遇する回数が何回くらいであるとき、いじめと感じるかの判断を求めた。クロス集計と  $\chi^2$  検定の結果から、性別によっていじめと認知する回数に違いが見られた。また、度数分布より、言葉がけの種類と回数によっていじめの認知が変化していることが確認された。クラスター分析により、『気遣い』『期待』『落胆』のカテゴリーが得られた。『落胆』は回数によるいじめ認知が起こりやすい項目群であることが明らかとなり、このクラスターの言葉がけで、いじめが見過ごされている可能性が示唆された。

注）本論文は 2020 年度明星大学心理学部卒業論文「言葉がけの回数によるいじめ認知の違い」（17F1-079 滝沢麗命）に若干の加筆修正を加えたものである。

### 問題

#### いじめ認知件数の変動

文部科学省（2019）が発表した「平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によれば、いじめの認知件数は年度により大きく変動している。平成 18 年度から平成 30 年度までの小中学校、高等学校のいじめ認知件数は、最大値で 543,933 件、最小値で 70,231 件であり、約 7 倍もの開きがある。これは、不登校児童生徒数のように長期的に見て“漸増”という変化ではなく、自死を伴う重大事態（いじめ防止対策推進法第 28 条第 1 項に規定）が発生するたびにいじめ認知の件数が大きく増加し、その後漸減する、というパターンを幾度にも亘って繰り返しているため、増減のパターンが安定していないためである。平成 27 年

～平成 30 年の 3 年間では、重大事態が増加し続け、いじめ認知件数も大きく増加し続けている。<sup>注1)</sup>

加えて、地域差の問題も大きい。平成 30 年度の児童生徒 1,000 人当たりの都道府県別いじめ認知件数を比較すると、宮城県が最多の 101.3 件であるのに対して、最少の佐賀県は 9.7 件と約 10 倍もの開きが生じており、地域による認知件数の相違が顕著である。

いじめ認知件数の地域差の原因を、いじめの判断基準の不統一や不徹底にあるとらえた文部科学省は、平成 25 年にいじめ防止等のための基本的な方針の改定を行い、具体的な事例や対策に関してより詳細な方針を示している。また、平成 29 年にいじめの重大事態の調査に関するガイドラインを策定しており、このガイドラインでは、学校の設置者及び学校の基本的姿勢や重大事態を

把握する端緒など、計10項目のいじめ調査に關する基準が示されている。しかし、これらの対策や判断基準の統一後も、いじめ認知件数は大幅に増加している。認知件数に加えて、法第28条第1項に規定する「重大事態」の発生件数も増加している。つまり、いじめの認知はされやすくなっているものの、有効な予防や対策ができるほど、その様相は把握できていないと言える。

注1) その後、いじめの認知件数は令和1年をピークに大幅な減少に転じた。これはコロナウィルスの全国的な感染拡大の影響（一斉休校など）によるところが大きいものと思われる。

### いじめの判断基準

熊谷ら(2016)によれば、いじめの判断基準は、何をいじめだととらえるかといういじめの分類と密接な関係にある。文部科学省(2019)は、「冷やかしかからかい…」、「仲間外れ…」、「軽くぶつかられたり…」などの種類と程度を分類して「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を実施している。また、これらとは別に、暴力行為に関する調査も行っている。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)は、暴力を伴ういじめと伴わないいじめを区別し、その発見の仕方も対応も異なることを指摘している。いじめの内容に注目した研究には、悪口やかからかいなどの「言語的ないじめ」、無視や仲間外しなどの「精神的ないじめ」、叩く、蹴るなどの「暴力的ないじめ」、悪いうわさや持ち物に落書きをするなどの「破壊的ないじめ」、金品を取る、持ち物をこわすなどの「略奪的ないじめ」に分類した山本(2006)がある。

山崎(2016:2017)は「いじめ」認知と「いじり」認知の境界について研究を行った。2つの架空のエピソードを用意して、対象者(「いじめ」または「いじり」を受けている側の生徒)及び傍観者

(その行為を周りで見ている生徒)の2つの立場から、そのエピソードの行為が「いじめ」であるか、「いじり」であるかを判断させた。「いじめ」と判断した時と「いじり」と判断した時で、後にとられる処行動に違いが見られるかどうかを調べた。その結果、同じエピソードに遭遇した場合でも、「いじめ」と認知するか、「いじり」と認知するかは人によって異なっていること、また、当事者及び傍観者のいずれの立場であっても、「いじめ」と認知した場合には、教師に相談するなどの介入的な対処行動がとられやすくなるのに対し、「いじり」と認知した場合には、周囲に救済を求めるなどの介入的な対処行動がとられにくくなるということを見出した(山崎, 2016:2017; 山崎・富田, 2019)。

このように、いじめの認知に関しては、これまで様々な研究が行われてきた。浜田・野田(1995)は、「いじめの見えにくさの大きな要因の一つは、実は、いじめの行為そのものの見えにくさではなく、いじめが行われていてもそれがいじめだとは気づきにくいところにある」と述べ、さらに「その行為一つだけをとってみれば、いじめだなんだと騒ぐほうがおかしいと思われそうなのが、いじめそのもの」とも述べており、いじめ問題の困難さのひとつにいじめ認知の問題があることを指摘している。

文部科学省(2019)が示したいじめの様態は、具体的な言語表現ではなく、「嫌なことや悪口等を言われた」といった言葉がけの内容そのものではない、抽象的な表現が主だった。教育現場で、いじめ認知の統一的基準の導入に困難が生じているにもかかわらず、具体的な表現や状況に注目したいじめの判断基準に関する知見は十分に提供されてこなかったと言える。

### いじめと判断される教育現場における言語的表現

熊谷ら(2016)によれば、文部科学省(2015)がいじめと判断したバスケットボールの事例で、

教育現場における児童生徒の言語的表現は、『排斥』、『不快』、『非難』、『激励』の4つのクラスターに分類することが可能であるという。また、これらのクラスターは、いじめだと認知しやすい順に『排斥』>『不快』>『非難』>『激励』となる。『排斥』や『不快』といった、関係を断ち切ったり、疎外されているように感じる分類がいじめだと認識されやすいという結果は、人々がいじめに関して、攻撃性を持っているかどうかではなく、尊厳を傷つけられたかどうかという点に重きを置いて考えているためと推測される。

しかし、この分類で比較的いじめと認識されにくかった『非難』、『激励』の項目の中にも、過去にいじめと判断された項目が存在しており、これらは見過ごされる傾向にあると言える（熊谷ら、2016）。こうした、いじめと認識されやすい具体的な言語表現についての研究は近年、盛んに行われているが、言語表現における微妙な言い回しの違いや頻度の違いに関する研究はそれほど多く見当たらない。

## 目的

本研究は、言葉がけの回数の違いに着目した。同じ言葉がけであっても、その回数や頻度の違いによって、いじめと認知されるかどうか異なってくるのではないかと考えた。

熊谷ら（2016）が事例文の適語補充に用いた表現を参考に、その言語表現が繰り返された場合、いじめと認知されるようになるのか、また、各言語表現と頻度の組み合わせによっていじめと認知される境界が変動するのか、さらには、頻度に応じたいじめ認知に男女差が見られるかどうか、を検証した。

## 方法

### 調査対象者および調査時期

本研究では、明星大学心理学部心理学科に所属する大学生の男女124名を調査対象者とした。

調査は、2020年11月に実施した。

### 調査手続き

本研究では、質問紙をGoogleフォームで作成し、調査対象者各自で質問に回答をしてもらうように求めた。

### 質問紙

文部科学省（2015）がいじめと判断したバスケットボールの事例を元に、Googleフォームによる質問紙を作成し、用いた。

質問内容：「以下の事例文を読み、空欄部分（【 】）に適語1～28を当てはめた時、あなたがA君だったとしたら、それがどのくらい繰り返されるといじめだと思うか、最も当てはまる頻度を選んでください。なお、いじめの定義等については深く考慮せず、適語の表現と回数に着目し、あなたの考えをお答えください。」

事例文：「体育の時間にバスケットボールをしている時、A君はB君からみんなの前で、【 】と言われた。」

適語：熊谷ら（2015）のクラスター分析の結果から、『非難』分類と『激励』分類を用い、バスケットボールや体育等の状況特異性が強いと考えられる項目を除いた計28項目（センスがない、ミス繰り返すなよ、そのミスどうにかならない、ミスなしで行こう、またミスか、次から気を付けてよね、ミス多すぎだよ、しょうがないな、そこでミスしないでしょ、お前のせいじゃないよ、どんまい、本気でやれ、またか、どこ見てんだよ、気にするな、今日のA君調子悪かったね、何しているんだ、もっとがんばれ、次は頑張ろう、何でミスしたんだ、無理しなくていいからね、しっかりしろ、ミスしないようにやって、ちゃんとやれ、気合い入れてやっ

て、次はしっかり頼むよ、真剣にやって、まじか)を適語として使用した (Table 1 参照)。

回答項目：選択肢は4項目とし、1.1回でいじめとを感じる、2.2~4回でいじめとを感じる、3.5回以上でいじめとを感じる、4.何回言われてもいじめとを感じることはない、とした。

## 結果

まず、回答に偏りがあった調査対象者のデータを除外した。その結果、分析に用いられた調査対象者は124名となった。

また、回答項目をいじめと認識する回数ごとに分類し、1回でいじめとを感じるを「回答項目1」、2~4回でいじめとを感じるを「回答項目2」、5回以上でいじめとを感じるを「回答項目3」、何回言われてもいじめとを感じることはないを「回答項目4」とした。

質問に使用した適語 (言語表現) を Table1 に示す。

Table1 質問項目

	言語表現
第1項目	センスがない
第2項目	ミス繰り返すなよ
第3項目	そのミスどうにかならない
第4項目	ミスなしでいこう
第5項目	またミスか
第6項目	次から気を付けてよね

第7項目	ミス多すぎだよ
第8項目	しょうがないな
第9項目	そこでミスしないでしょ
第10項目	お前のせいじゃないよ
第11項目	どんまい
第12項目	本気でやれ
第13項目	またか
第14項目	どこ見てんだよ
第15項目	気にするな
第16項目	今日のA君調子悪かったね
第17項目	何しているんだ
第18項目	もっと頑張れ
第19項目	次は頑張ろう
第20項目	何でミスしたんだ
第21項目	無理しなくていいからね
第22項目	しっかりしろ
第23項目	ミスしないようにやって
第24項目	ちゃんとやれ
第25項目	気合い入れてやって
第26項目	次はしっかり頼むよ
第27項目	真剣にやって
第28項目	まじか

## クロス集計と $\chi^2$ 検定

性別によっていじめと認知する回数に変化があるかについて、クロス集計と $\chi^2$ 検定により検討した。 $\chi^2$ 検定の結果、第12項目 (本気でやれ) が有意であった ( $\chi^2(3) = 11.371, p < .01$ )。また、第2項目 (ミス繰り返すなよ) も有意であった ( $\chi^2(3) = 7.69, p < .05$ )。第2項目と第

Table 2 第2項目 (ミス繰り返すなよ) のクロス表

		回答項目1	回答項目2	回答項目3	回答項目4	合計
男性	度数	3	10	14	20	47
	期待度数	1.5	13.3	17.4	14.8	
	調整済み残差	1.6	-1.3	-1.3	2.1	
女性	度数	1	25	32	19	77
	期待度数	2.5	21.7	28.6	24.2	
	調整済み残差	-1.6	1.3	1.3	-2.1	
合計		4	35	46	39	124

Table 3 第12項目（本気でやれ）のクロス表

		回答項目 1	回答項目 2	回答項目 3	回答項目 4	合計
男性	度数	5	18	8	16	47
	期待度数	4.9	12.1	15.9	14.0	
	調整済み残差	0.0	2.5	-3.1	0.8	
女性	度数	8	14	34	21	77
	期待度数	8.1	19.9	26.1	23.0	
	調整済み残差	0.0	-2.5	3.1	-0.8	
合計		13	32	42	37	124

12項目のクロス表を Table2、Table3 に示した。

残差分析の結果、第2項目（ミス繰り返すなよ）は、男性は回答項目2、回答項目3（2～4回でいじめと感じる、5回以上でいじめと感じる）の残差の値が低く、回答項目1、回答項目4（1回でいじめと感じる、何回言われてもいじめと感じることはない）で残差の値が高くなっていった（ $p<.05$ ）。これに対して、女性は回答項目2、回答項目3（2～4回でいじめと感じる、5回以上でいじめと感じる）の残差の値が高くなっており、回答項目1、回答項目4（1回でいじめと感じる、何回言われてもいじめと感じない）の残差の値が低かった（ $p<.01$ ）（Table 2 参照）。

第12項目（本気でやれ）は、男性は回答項目2（2

～4回でいじめと感じる）の残差の値が高く（ $p<.05$ ）、回答項目3（5回以上でいじめと感じる）の残差の値が最も低くなっていった（ $p<.01$ ）。これに対し、女性では逆に、回答項目2（2～4回以上でいじめと感じる）の残差の値が低く（ $p<.05$ ）、回答項目3（5回以上でいじめと感じる）の残差の値が高くなっていった（ $p<.01$ ）（Table 3 参照）。

#### 度数分布累計グラフに基づく視察

言葉がけによっていじめと認知する頻度に違いがあるかについて、度数分布を用いて検討することとした。度数分布のパーセントグラフを Figure1 に示した。

### 項目の頻度によるいじめ認知の違い

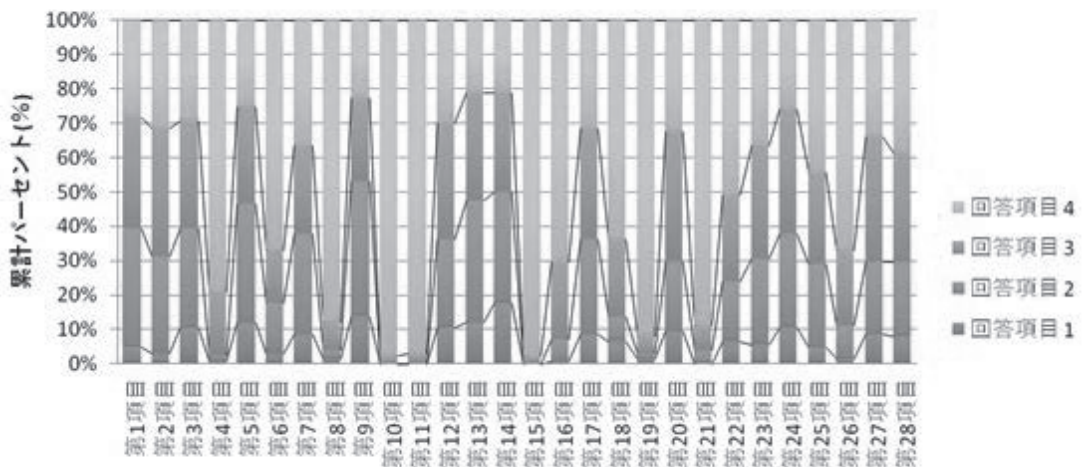


Figure1 項目の頻度によるいじめ認知の違い

第8項目(しょうがないな)、第10項目(お前のせいじゃないよ)、第11項目(どんまい)、第15項目(気にするな)、第19項目(次は頑張ろう)、第21項目(無理しなくていいからね)は、回答項目4(何回言われてもいじめと感ずることはない)が90パーセント以上を占めていた。また、第1項目(センスがない)、第2項目(ミス繰り返すなよ)、第3項目(そのミスどうにかならない)、第5項目(またミスか)、第9項目(そこでミスしないでしょ)、第12項目(本気でやれ)、第13項目(またか)、第14項目(どこ見てんだよ)、第17項目(何しているんだ)、第20項目(何でミスしたんだ)、第23項目(ミスしないようにやって)、第24項目(ちゃんとやれ)、第27項目(真剣にやって)、第28項目(まじか)は、回答項目1(1回でいじめと感ずる)~回答項目3(5回以上でいじめと感ずる)の合計が60パーセント以上となった。これらの項目では、回答項目の割合にばらつきはあるものの、回答項目2(2~4回でいじめと感ずる)や回答項目3(5回以上でいじめと感ずる)の選択率が相対的に高くなっており、頻度が重なるにつれて、いじめ認知が増える言葉がけである可能性がある。

$\chi^2$ 検定の結果は、第14項目以外の項目が全て有意であった( $p < .01$ )。

### **クラスター分析による項目の分類と下位尺度構成**

言語的表現によるいじめ認知のされやすさの類似性について、クラスター分析により検討することとした。全ての項目(全28項目)で、どの回答項目がどのくらい選択されたか、回答項目の選択回数のパターンに基づき、クラスター分析を行った。近似の指標にはユークリッド距離を、樹形図化にはWard法を用いた。結果の樹形図をFigure 2に示した。

Figure 2から、比較的近い位置に収束する3グループ(クラスター)が見出された。

第1クラスターは、回答項目1(1回でいじめと感ずる)と回答項目2(2~4回でいじめと感ずる)に回答者がいなかった項目(項目10、項目15、項目11)や、回答者の約9割が回答項目4(何回言われてもいじめと感ずることはない)と回答した項目(項目8、項目21、項目19)によって構成されていた。

第2クラスターは、回答項目1(1回でいじめと感ずる)、回答項目2(2~4回でいじめと感ずる)、回答項目3(5回以上でいじめと感ずる)を選択した回答者が一定数いるものの、全体の約7割が回答項目4(何回言われてもいじめと感ずることはない)と回答していた項目(項目16、項目26、項目18、項目6、項目4)によって構成されていた。

その他の項目が第3クラスターを構成していた。第3クラスターは回答項目1(1回でいじめと感ずる)~回答項目3(5回以上でいじめと感ずる)の累計が45パーセント以上の項目で構成されていた。

Figure 2より、第1クラスターは、「お前のせいじゃないよ」や「気にするな」、「どんまい」といった項目から構成されており、相手へのフォローの気持ちを表現している項目群であると推測した。よって、第1クラスターは『気遣い』を示すグループであると考えられる。

第2クラスターは、「今日のA君調子悪かったね」や「次はしっかり頼むよ」、「もっとがんばれ」といった項目から構成されており、相手が次回以降に活躍する事を促すことを表現している項目群であると推測された。よって、第2クラスターは、『期待』を示すグループであると考えられた。

第3クラスターは、「またミスか」や「どこ見てんだよ」、「そこでミスしないでしょ」といった項目から構成されており、相手が期待通りではなかったことを表現している項目群であると推測した。よって、第3クラスターは『落胆』を示すグループであると考えられた。

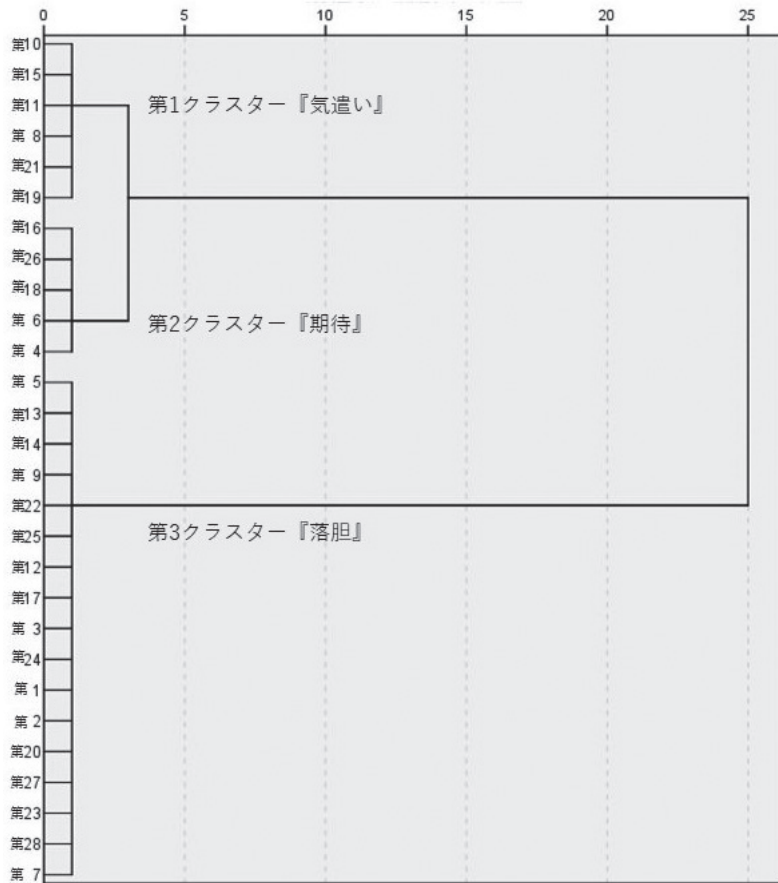


Figure2 クラスター分析（Ward法）に基づく樹形図

## 考察

### いじめを認知する回数の性別による違い

男女を含むクロス集計と $\chi^2$ 検定の結果から、いじめと認知する頻度に性別による違いがあると考えられる。本研究では、熊谷ら（2016）の結果で示されたいじめと認知されにくい項目（『非難』分類の項目、『激励』分類の項目）を利用して質問紙を作成している。いじめと認知する頻度の選択率に違いが見られたということは、言葉がけの頻度がいじめ認知に関係しているためと推測できる。

クロス集計と $\chi^2$ 検定の結果から、第2項目「ミス繰り返すなよ」、第12項目「本気でやれ」は性別によっていじめを認知する回数が異なってい

る言語表現であると考えられる。

第2項目「ミス繰り返すなよ」については、男性では、回答項目4（何回言われてもいじめと感ずることではない）の度数の値が相対的に高くなっていたのに対し、女性では、回答項目2（2～4回でいじめと感ずる）、回答項目3（5回以上でいじめと感ずる）の度数が男性に比べて相対的に高くなっていた。このことから第2項目（「ミス繰り返すなよ」）の言葉がけについては、女性の方が男性よりも少ない頻度でいじめと感ずりやすくなっている可能性が示唆される。

その理由として、相手からの注目度が高いと感ずるかどうかが男女によって異なっているためではないかと推測した。「ミス繰り返すなよ」とい

う言葉をかけられることで、女性は自分がミスすることを注視されていると感じ、相手が自分の失敗を注目していると認識する傾向が強いのではないか。その結果、女性は「ミス繰り返すなよ」という発言の頻度が多くなると、いじめと認知しやすくなったのではないだろうか。一方、男性は「ミス繰り返すなよ」という言葉を、女性よりも相手から客観的に見られていてと感じやすく、相手が自分のミスだけに注視しているわけではないと感じる傾向が強いため、この言葉がけの頻度が多くなったとしても不快に感じにくく、いじめと認知しにくかったのではないだろうか。

第12項目「本気でやれ」については、男性では回答項目2(2~4回でいじめと感じる)の残差の値が高く( $p<.05$ )、回答項目3(5回以上でいじめと感じる)の残差の値が低くなっていた( $p<.01$ )。これに対し、女性では逆に、回答項目2(2~4回以上でいじめと感じる)の残差の値が低く( $p<.05$ )、回答項目3(5回以上でいじめと感じる)の残差の値が高くなっていた( $p<.01$ )。つまり第12項目の言葉がけ(「本気でやれ」)は、女性よりも男性の方がより少ない回数(2~4回)でいじめと感じやすい可能性が示唆される。

第12項目「本気でやれ」については、自分が期待されていると感じるかどうかは男女によって異なっていることが背景にあるのではないかと推測した。「本気でやれ」と言われた時、女性は相手から期待されていると感じやすく、プラスにとらえることが可能であり、その結果、言葉がけの頻度がそれほど多くならなければいじめと認知しにくくなるのではないか。一方、男性は相手から「本気でやれ」と言われると、自身の努力や実力が認められていないと感じやすく、言葉がけの頻度が少なくても、いじめと認知しやすくなるのではないだろうか。

### 言葉がけの頻度によるいじめ認知の違いの分布

熊谷ら(2016)によれば、実際の学校場面におけるクラブ活動や部活動などにおいて、『激励』や『非難』は、仲間同士でお互いに鼓舞する場面では、よく耳にする言葉であるという。また、このような言葉は普段から耳にする機会が多く、相手を励まそうという配慮が感じられるために、いじめとは認識されにくいと述べている。しかし、本研究の結果(Figure 1)からは、こういった『激励』や『非難』の言葉でも、回数を重ねることによっていじめと認知されることがあることが示された。

本研究の結果から、同じ言葉がけであっても、その頻度によっていじめ認知の仕方に影響してくる可能性が示された。

### 言葉がけの頻度によるいじめ認知の違いと各言語表現の特徴

Figure2より、第1クラスターは、「お前のせいじゃないよ」や「気にするな」、「どんまい」といった項目から構成されており、相手へのフォローを表現している項目群であると推測した。よって、第1クラスターは『気遣い』を示すグループであると考えられる。

第2クラスターは、「今日のA君調子悪かったね」や「次はしっかり頼むよ」、「もっとがんばれ」といった項目から構成されており、相手が次回以降に活躍する事を促すことを表現している項目群であると推測した。よって、第2クラスターは、『期待』を示すグループであると考えられた。

第3クラスターは、「またミスか」や「どこ見てんだよ」、「そこでミスしないでしょ」といった項目から構成されており、相手が期待通りではなかったことを表現している項目群であると推測した。よって、第3クラスターは『落胆』を示すグループであると考えられた。

各クラスターを構成する項目の度数分布を比較すると、第1クラスターは、回答項目1(1回で



いじめと感じる)と回答項目2(2~4回でいじめと感じる)の度数が0で、回答項目4(何回言われてもいじめと感ずることはない)の度数が多いことから、何回言われてもいじめと感ずることはないと感ずる人が多い項目群であると考えらる。また、第2クラスターは、第1クラスターと分布が類似しているが、回答項目3(5回以上でいじめと感ずる)の度数が第1クラスターよりもわずかに多かつた。このことから、少数ではあるが、2~4回言われることで、これらの言葉をいじめと感ずる人が一定数存在している項目群であると考えらる。第3クラスターは、回答項目2(2~4回でいじめと感ずる)や回答項目3(5回以上でいじめと感ずる)の度数が最多となる項目が多いことから、回数を重ねることはいじめと認知されやすい項目群であると考えらる。

### 見過ごされるいじめの実態

熊谷ら(2016)は、『『激励』や『非難』はいじめとして認知されにくい表現であると言える』と述べているが、本研究の結果から、コミュニケーションにおけるいじめの問題には、言葉そのものが持つ意味によって引き起こされる事案の他にも、見過ごされている事案があると考えらる。本研究では、言葉がけの回数に着目したが、日常におけるコミュニケーションを構成している要素は回数以外にも多様に存在している。例えば、場面の公衆性、発言をしている相手が異性であるかどうか、発言をしている人数など、幅広く考えらる。学校という限られた空間での生活であるからこそ、頻繁に変化しているこれらのコミュニケーションの構成要素にもう少し目を向けるべきではないかと考えらる。

また、こうした要素に目を向けやすくするためには、教員のみでの観察ではなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、指導主事といった専門職員との連携を重視する必要性もあ

ると考えらる。いじめの発見や対策には、観察する側の多様な視点が必要不可欠であると考えらる。

### 今後の課題

今回の研究では、言葉がけの回数を区切っているいじめの認知判断を行わせたが、その区分は大まかなものでしかなかつた。いじめの認識が変化する回数の境界線をより正確に測るという意味でも、改善してゆく必要があると考えらる。また、今回の研究で使用した場面は、体育授業でのバスケットボール場面のみであり、言語表現も28項目と限られた項目であつた。文部科学省が公表している過去のいじめの事例では、言葉そのものが相手を傷つける言葉であるとは限らない場合であっても、いじめと判断されたことが多数報告されている。こうした言葉にも着目し、その言葉が日常のコミュニケーションを構成する他の要素(場面の文脈性等)が変化することで、いじめと認知されやすくなるのかどうかを探求することが大切なのではないかと考えている。

今回の研究から、言葉そのものの意味だけではなく、言葉がけの頻度に応じて、いじめの捉え方が変化することが実証された。このことは、いじめの本質を理解する上でおおいに役立つことと思われらる。今後、より正確にいじめを見極めることのできる判断要素が増えていくことを期待する。

### 引用文献

- 浜田寿美男・野田正人(1995)事件のなかの子どもたち—「いじめ」を中心に、子どもと教育、岩波書店。
- 熊谷由美・山本奨・岩間安美(2016)言葉によるいじめの判断基準—大学生の教職志向による比較—,岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,第15号,237-248。
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)いじめについて,正しく知り,

- 正しく考え、正しく行動する。  
 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2015）  
 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」。
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2019）  
 平成30年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」。
- 山本巳樹（2006）いじめ防止に関する研究～学校教育活動全体からのアプローチ～ 平成18年度新教育大学大学院および金沢大学大学院修了者研究報告（概要），2006年度石川県教育センター，<https://www.ishikawa-c.ed.jp/content/houkoku/daigakuin/daigakuin2006/04.pdf>（閲覧：2020年11月20日）。
- 山崎鞠（2016）大学生における「いじり」の対象者と傍観者の認識の違いと対処法の違いについての研究，いわき明星大学人文学研究科臨床心理学専攻 平成28年度修士論文。
- 山崎鞠（2017）大学生における「いじり」の対象者と傍観者の認識の違いと対処法の違いについての研究，いわき明星大学心理相談センター 紀要，第12号，25-26。
- 山崎鞠・富田新（2019）大学生における「いじり」と「いじめ」の対象者と傍観者の認識の違いと対処法の違いについての研究（2），東北心理学会第73回大会発表抄録集（東北心理学研究），p.13。

---

An investigation about how student's recognitions of bullying change as the frequencies of the same words said to them increase

TAKIZAWA, Reina  
 ATSUGI School of Nursing  
 TOMIDA, Arata  
 School of psychology, Meisei University

### Abstract

The purpose of this study was to investigate how the students' judgment criteria of bullying change as the number of times of the verbal expressions they will encounter in the basketball games increase. Using the items of the verbal expression categories "blame" and "encouragement" extracted by Kumagai et al.(2016), 124 students in college of psychology, Meisei University were asked to decide the number of times that they will encounter in the basketball games to change their recognitions of bullying. By the results of cross-tabulation and  $\chi^2$  test, it was revealed that there were differences in the judgements of bullying by gender. In addition, from the frequency distribution, it was suggested that the recognitions

of bullying changed depending on the types and the frequencies of verbalization. The cluster analysis revealed that there were 3 categories 'caring', 'expectation' and 'disappointment' in the verbal expressions. "Disappointment" was considered to be the most changeable category of the bullying recognition based on the number of times of verbalization, and it was suggested that bullying may be overlooked in this category.

**Key Words** : judgement criteria of bullying, repeat frequency of the same verbal expressions, classification in verbal expressions for recognizing bullying

---